

本気の残薬管理

福井 繁雄 ●一般社団法人Life Happy Well 理事



残薬ボックス

要旨

残薬をなぜ適正にしなければならないのか。

今回、様々な医療機関や患者さん宅で残薬管理の大切さを熱弁することにより、その熱弁した相手がまた別の方へ同じように話してくださったのが印象的だった。患者さん自身の気づきにもなり、一時のことではなく、体調もよくなったという話も聞くことができた。

本来、残薬管理を常に当たり前に行なければならない。これが医療費削減にもなり、環境破壊を食い止めることにもつながっていくのだと考える。



環境破壊につながるという話を聞いて持ってきてくださった残薬

1. 背景と目的

残薬管理を徹底する、絶対に！

19歳の時に祖母の薬剤管理をしながら、日本の医療は残薬が増えるシステムだと感じていた。患者さんが主治医には何も話せない。

- 副作用が出たり、効果が出なくても主治医に言えない。
- 服用しないからどんどん残薬になっていく。
- 症状も良くならない。かつ、新しい薬が処方される。

これは私の祖母だけではなく、日本全国で同じ現象が起こっているのだと考えた。

この残薬管理を私たち薬剤師ができないのか。患者さんを取り巻く環境を変えられないのか。

最初は残薬を把握していないことで間違った薬を飲んでしまい、救急搬送された記事を新聞へ投稿した。そこから専門誌への掲載、認定薬剤師研修会での啓もう活動、SNSの活用等で、医療業界ではない方々へも残薬管理がいかに大切かを訴え続けてきた。

必要な残薬と、ゼロにしたい残薬を明確にしたい。

2. 活動の方法

残薬「0」への挑戦

①患者個人の残薬管理

➡まず、残薬が何か、それを管理することによってどういう利点があるのかをわかりやすく説明していく。そのうえで、残薬を薬局に持参もしくは訪問しながら、様々なケアを行っていく。

②薬局内で不動在庫になりやすい薬剤を抽出し、原因の追究

➡局内在庫の見直し(毎月)

- 返品不可薬(冷所保存薬など)の徹底管理

- 局内を越えて、他薬局との不動在庫連携
これらを浸透させるために研修会を行う。
- ③医師だけでなく、患者を取り巻く人々へ
残薬の周知
 - ➡•薬局・介護関係、役所職員への啓もう活動（ポスター、声かけ等）
 - ブラウンバッグ（残薬袋）の活用
- ④残薬の薬価ベースでの金額の認識
 - ➡薬局・患者さんへの金額提示。
- ⑤②に関連するが、症状だけでなく時季的
に服用している否か
 - ➡薬剤の発注方法を研修する（残薬学として）。

3.現状の成果・考察

①残薬ボックスの効果

37cm四方のサイズにしたため、インパクトあり。

「あの箱はなに?」と聞いてくる患者さんがいる。そこから残薬の話になり、自宅にある残薬を持参してくれるようになった。

②残薬ポスターの効果

最近、コロナ禍の関係で雑誌を置かない薬局が増えているので、その分、ポスターを見る患者さんが増えた。その中で、ポスターを見て、薬はお金が発生していることを再認識してもらい、きっちり服用することが大事だという説明につながった。

また、患者さんだけでなく、薬局で働くスタッフも薬の扱い方が変わった。

③残薬の話から

薬に期限があることを認識していない患者もあり、常備薬として“必要だと思った時に飲む”を繰り返していることもあるようだ。きっちり服用すること、不安があれば薬局に問い合わせをすること等を説明するきっかけになった。

また、一番反響があったのが、残薬を捨てることで環境破壊につながっているということであった。ご自身のためにと言うと生活に



回収した残薬の処理



飲み切ってくださいと言われたが改善したからと残っていた薬

困っているわけではないと、それが環境破壊をしないためになると動きやすいようだ。

④研修会から

「薬が入手しにくい、薬価差益がほぼない」という現状からも、ますます残薬に目を向けなければならない。「薬が入手できないから処方を受けることができない」ではなく、患者のために何ができるのか、しっかり考えていかなければならない。

4.今後の展望

これからも残薬管理を!

定期的に薬を飲む習慣のない方は特に、余った薬を常備薬として置いておく傾向にあるようだ。抗生剤のように最後までのみ切ってくださいと言われていても症状が改善すると服薬をやめて、また症状が出た時にのもうと思っ保存してある。定期的に薬をのんでいる方は、のみ忘れ等があっても同じ処方を出してもらおうの繰り返し。

今回の法改定で、ますますここをしっかりと薬剤師がフォローすることが必要になった。患者さんに関わる医療・介護従事者とこれらの情報を共有することが、患者さんの健康に直結し、また、残薬の減少にもつながると考える。

杉浦記念財団の助成により、再度、残薬に目を向けることで、薬がリスクであって必要なものである認識を持ってもらった。今後、さらに全国へと定着させていきたい。